

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K14041

研究課題名（和文）小学校音楽科における児童の音楽表現能力の育成 音楽の言語化と身体知に着目して

研究課題名（英文）Fostering the Ability of Musical Expression in Elementary School Music Classes :  
Focusing on Verbalization and the Embodied Knowledge of the Music

研究代表者

山中 和佳子（Yamanaka, Wakako）

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：20631873

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、音楽の言語化と身体知の関係に着目して、音楽の言語化の様相、及び表現技能の向上のプロセスを探り、小学校音楽科における児童の音楽表現能力を育成する指導方法等を明らかにした。

その結果、比喩表現や比喩的な動作が、演奏時の身体感覚や身体操作への気づきを生み出し、児童相互の「感覚の共有」を促すこと、表現活動においても「音を聴く」意識をもつ必要性、教師及び児童が表現時の身体的、音楽的な相違点に気づき言語化して共有する必要性、児童の経験の中で想像し得るものと音を結び付ける言葉を使用することによって、児童の表現欲求の向上と表現の質の深まりが促されていることを事例から見る事ができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音楽表現力の育成を目指すにあたっては、授業において第一に「音を聴く」活動を音楽表現の活動と同等に組み込み、自身や他者の音楽への聴取の姿勢を児童とともに教師も意識して身につけること、第二にそれを踏まえて音楽を言語化するという活動の流れを組み込むことが重要であり、音楽表現+聴く 聴いたことを言語化 音楽表現+聴くというサイクルを位置付けることを提案した。これらのことは論文として公表しているとともに、この研究結果を活かして学校現場での授業研究に対する提案や実践への助言等を行っている。

研究成果の概要（英文）：In this study, I focused on the relationship between the verbalization of music and embodied knowledge, explored the aspects of the verbalization of music and the process of improving expressive skills, and clarified teaching methods and points to keep in mind in order to foster musical expressive abilities of pupils in elementary music classes. As a result, I was able to point out the following: Metaphorical expressions and figurative actions will help the pupils to become aware of physical sensations and manipulations during the performance, and encourage them to share their senses with each other. Necessity for them to be aware of listening to sound in expressive activities. Necessity for them to notice physical and musical differences in expression and to verbalize and share them. The teacher's use of words that connect sounds with what the pupils can imagine in their experiences will help them to improve their desire for expression and deepen the quality of their expression.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽表現 身体 言語 音 技能

## 1. 研究開始当初の背景

近年の学校教育では、子供たちが身につける資質・能力の一つとして知識・技能の習得が示されており、表現活動及びそれに伴う技能の向上は、現在の学校教育において求められる重要な学習活動の一つである。そもそも表現行為は、人間の精神を作り育てるにあたってかかせない。音楽の表現行為に目を向けると、そこには、表出される音楽事象とそれに呼応する演奏者や聴衆の身体があり、表現者自身の感情や身体性のメタ認知が行われたり、他者との共有を図るために様々な音楽事象が言語化されたりしている。何かを生み出す表現の技能的向上では、柴田(2003)が身体知化における認知行為と実践的な身体的行為の統合の必要性を指摘したように、既存の知識と身体感覚や身体動作の認知、及びこれらから得た情報を踏まえた再表現というサイクルが行われる。したがって、音楽表現行為においては身体的認知及び音楽事象の言語化が必須であり、教科教育としての音楽活動においても同じく、この部分が重要な学習内容となるだろう。

表現行為における身体知については哲学や心理学の分野で多数研究されているほか、表現行為における言語についての研究には、生田によるわざ言語に関する研究(2014等)が挙げられる。教科教育としての音楽表現行為に関する分野には、今川による身体的発達に着目した一連の研究(2013等)があるものの、まだ十分に研究が蓄積されているとはいえない。音楽科教育の言語活動については、筆者が携わった実践研究(2014等)や他学校の研究部会の報告等、数多く研究されてはいるが、現場の教師からはどのように音楽を言葉で表現すれば良いのか、という戸惑いの声がかかれる。これらの研究・教育現場の課題や要請に応え、児童の音楽活動における思考力や表現能力を伸ばすためには、学校現場の授業実践を分析するだけでなく、音楽の様々な事象をどのように切り取り言語化しているのか、また身体知化へのプロセスをどのように辿るのかをプロの音楽活動から見取り、両者の視座から類型化したうえで、教科教育の実践へと還元させることが必要ではないかと考え、研究課題と内容を設定した。

## 2. 研究の目的

本研究では、音楽の知識と表現の質との関係性、音楽活動における「思考」と「言語化」、音楽事象の言語化と身体知との関係性に着目し、学習者間で交わされる言葉と指導者による指導言、それに伴う音や音楽表現の質の変化、学習者の意識や意欲の変化を見ていく。これらを通して、音楽事象の言語化の様相、及び表現技能の向上のプロセスを探り、小学校音楽科における児童の音楽表現能力の育成を目指した実践の提案、指導のポイントの明確化と音楽表現活動の教育的意義を指摘することが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究では、文書資料、プロの音楽家及び小学校の音楽科教育を研究対象とする。

- (1) 人工知能研究、哲学や心理学等の関連領域における知見を整理する。
- (2) プロの音楽家への調査を通して、他者への音楽事象の伝達方法とそれらの特徴を分析する。
- (3) (1)と(2)を踏まえて、小学校低・中・高学年の授業実践における音楽的言語の類型化を行い、表現活動に関する授業実践時の留意点を分析する。

## 4. 研究成果

### (1) 関連領域からの知見の整理

人工知能研究分野では、身体に対する認知に関して身体的行為を言語化することの有効性が指摘されている。諏訪によれば、メタ認知における「認知過程」について「言語的に考えている過程」「環境を五感で知覚する過程」「自分の身体部位がどう動き、その結果どんな感触を得ているかを知覚する過程」があり、これらの認知過程については身体が体感する第一段階、体感したことを言語化する第二段階があるという。この第二段階の行為を諏訪は「メタ認知的言語化」と呼称し、「自分の身体がどう動き、どう体感しているかを言語化することによって、現在の身体では達成できない身体動作が開拓され、身体知を獲得できる」と述べている(諏訪 2005 p.527)。

また、古川らは、技能の獲得や向上を含む教授場面における学習者の「自主性」について「言葉による説明だけでなく、ビデオを用いた視覚的な情報や、さまざまな道具を取り入れた方法、学習者の生体信号を用いたバイオフィードバックなど、工夫をこらしたフィードバック方法を考えていくことが重要」であり、そのタイミングや頻度、精度は学習効果を大きく左右することを指摘している(古川ほか、2009、p.152)。

表現(実技)行為の言語化に関する研究には、生田による「わざ言語」が挙げられる。生田のいう「わざ言語」には、「比喩的な感覚の表現を通して行為の発現を促し、具体的な動きや形を指示する役割」「ある種の身体感覚をもつように促し、ある種の身体感覚をもつようにしむける役割」「到達段階」への感覚を学習者自らが探っていくようにいざなうという役割の三つの役割がある(生田ほか、2014、pp.28-29)。

これらの知見から、技能の向上においては、身体感覚や身体操作の言語化、多様な内的フィードバック方法の導入が重要な要素であるといえる。

## (2) プロの音楽家のレッスンに見られる特徴

プロの演奏家による大学生へのレッスン、及びプロの作曲家による社会人へのレッスンの観察及び聞き取り調査を行い、プロがどのように自分の意図や意思の伝達を行うのかについて分析した。その結果、演奏家と作曲家に共通して主に「模範奏」「言葉による説明」「ジェスチャー」の三つの方法があることが分かった。

「模範奏」では、学習者の明確な意識が必要であるとプロが考えている音やフレーズ、和音進行、歌詞に対して、呼吸の仕方等の身体操作を強調させた演奏、プロが良いと考えている演奏と問題があると考えている演奏を比較聴取させるために連続して行うといった場面が多かった。

「言葉による説明」では、身体部位の使い方に関する直接的な言葉、曲のイメージにあった音色や強弱等を意識させるために身体感覚を呼び起こし、メタ認知させるための比喩表現(自然の風景や日常生活や心情)、音同士の繋がりや構成を意識させる楽曲分析に関する言葉が用いられていた。「ジェスチャー」については、「言葉による説明」を補完するようなジェスチャー:自身の身体部分に触ったり押さえたりするような動作、形容詞等の意味を視覚的に強調し理解させるための身振り、学習者の演奏時に行う指揮のような指示的身振り、模範奏時に伝えたい部分を強調する身振り、アイコンタクトや曲に合わせた表情があることが分かった。

さらに、作曲家への調査では、作曲されたものを実際に演奏して聴き取らせ、その後それについて比喩表現を使って言語化し、そのように感じた理由について音楽理論を関連させて説明していた様子が見られた。創るという行為においても、「体感」を踏まえたうえで、「比喩表現」「理論的根拠」の流れで音楽表現を言語化し、聴き取る力を育てようとしていた。また、音楽に対する表現者側のイメージと聴き手のイメージのずれや違いを比喩的な表現を使って伝えようと同時に、音楽理論に基づいて原因を説明することが効果的であると考えていることが分かった。

## (3) 小学校での音楽科授業実践

(1)と(2)の内容を踏まえ、小学校音楽科での表現活動の観察及び教師への聞き取り調査を行った。まず、児童の音楽活動における「思考」と「言語化」、音楽事象の言語化と身体知との関係性を視点として分析した。その結果、技能向上及び音楽の質的な向上を支える言語化においては、様々な身体感覚を想起させ、その場にいる全員がそれを共有できるような多角的な指導言を用いる必要があること、比喩表現と比喩的動作を用いることによって、その動作を引き起こす身体感覚や感情を複合的に想起させることが児童の自身の表現への注視や音楽を質的に深めることに対して効果的であるということが指摘できた。

次に、児童及び教師の言語化と表出される音楽の質との関係について観察及び分析を行ったところ、教師が音を「出す」ことに関する指導言から「聴く」ことに関する指導言へとシフトする意識を持つこと、教師が児童の表現行為の身体的、音楽的な相違点を見取り言語化して共有することが、児童の表現意欲の活発化と音楽表現の質の深化を促している様子が見られた。聴く活動では、児童の経験の中で想像し得るものと音を結び付けた指導言を用いることで、児童は自分や相手の表現を意欲的に聴き合っており、児童の間でも音楽表現の質的深化のための批判的思考による言語を用いていた様子が見られた。多くの児童がもっているだろう生活経験に基づく指導言を用いることによって「感情の共有」「感覚の共有」が促されていたと考えられる。

さらに、児童同士で指摘し合う際の言葉の使い方や身体表現と言葉との関連、及び音楽の特徴への着目点について分析した。低学年では、独自に視覚化する児童の工夫や、身体表現を行うことによるアーティキュレーションの表現の自然な表出など、身体動作や身体表現を伴うことが多様な音楽表現へとつながっていた様子が見られた。中学年の言語表現には、擬音語での言語表現と実際の音を聴き比べて関連付ける姿が見られた一方で、同じ言葉を用いても擬音語から想像する音質と実際に表出した音質に対する捉え方が個々人で異なっている状況が見られた。音楽表現を深めることへの身体表現や身体動作の有効性が確認できたとともに、言語の活用とともに実際の音や実演を介してのコミュニケーションが重要であることが確認できた。

これまでに明らかにしたことを踏まえた授業実践を小学校教諭に依頼し、その観察及び分析を行った。低・中・高学年の各授業においては、「音を聴く」ことに留意させる指導言を組み込む、生活経験を想起させる比喩表現・比喩動作と音楽表現とを関連付けた指導言や活動を組み込む、「自分や友達の身体の使い方」に意識を向ける活動や指導言を組み込むことを意識した。その結果、曲のイメージを演奏表現として具体化するための児童自身による技能への意識づけにつながる事が分かった。さらに、高学年だけでなく低学年でも演奏時に児童が自ら「演奏のコツ(より自分のイメージに合う演奏方法)」を見つけ、言葉で全体共有し教えあう時間が、演奏時の身体操作への意識づけをより促していることが明らかになった。しかし、特に低学年では児童自身が比喩表現を用いることができて、すぐに身体感覚や身体操作とそれを関連付けたり、言語での表現と音楽の表現とを結びつけて技能の向上を図ったりするには時間をかけて学習を進める必要があり、身体への意識づけに関して細かいスモールステップの設定が重要であることが確認された。

## (4) まとめ

音楽表現力の育成を目指すにあたっては、第一に「音を聴く」活動を音楽表現の活動と同等に組み込み、自身や他者の音楽への聴取の姿勢を児童とともに教師も意識して身につけること、第二にそれを踏まえて音楽を言語化するという活動の流れを組み込むことが重要である。授業に

においては音楽表現 + 聴く 聴いたことを言語化 音楽表現 + 聴くというサイクルを位置付けることが求められる。音楽の言語化については、音楽用語や形容詞等に加えて、擬音語や多くの児童がもっている生活経験を想起させる比喩表現・比喩動作が有効である。さらに、「聴く」活動を中心としつつ自分や友達の身体の使い方に意識を向けるような活動や指導言が、音楽的な気付きを促し表現技能の向上への意欲を生み出すうえで有効である。これらの活動を毎時間積み重ね聴取能力及び音楽の言語化の能力の向上を図ることは、児童自身の音楽表現時における身体的気付きを深めるとともに、音楽的な表現力の育成に直接的につながる。とはいえ、もちろん音楽は言葉で全て説明できるものではない。音楽表現活動の教育的意義は、音と言葉による表現を通じることによって、児童の音楽能力の深化はもちろんのこと、児童自身が自分の身体性に気付き、音楽は言葉では説明しきれないことに気付き、言葉を超えた他者との感情及び感覚の共有・共振を行い、新たな自己表現の可能性を広げることにあるのである。

今後は、これらの成果を踏まえてさらに研究論文として公表し、学校現場への提案を続けて児童の音楽表現力の育成と音楽科教育の発展に寄与していく。

#### 引用文献

柴田庄一他(2003)「技能の習得過程と身体知の獲得 主体的関与の意義と「わざ言語」の機能」名古屋大学『言語文化論集』第24巻第2号, pp.77-93

諏訪正樹(2005)「身体知獲得のツールとしてのメタ認知的言語化」『人工知能学会誌 20巻5号』pp.525-532

古川康一ほか(2009)『知の科学 スキルサイエンス入門 身体知の解明へのアプローチ』オーム社

今川恭子他(2013)「パネルディスカッション 身体・モノ・音,それってアフォーダンス?(第44回大会報告)」日本音楽教育学会『音楽教育学』43(2) pp. 63-68

生田久美子, 北村勝朗編著(2014)『わざ言語 感覚の共有を通しての「学び」へ』慶応義塾大学出版株式会社

山中和佳子(2014)「附属福岡小学校における大学教員の授業実践 自分の思いを表現するための楽器演奏の技能を伸ばすために」福岡教育大学教育学部・附属学校共同研究部会議『大学教員による附属学校・園との授業実践の研究』pp.4-10

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山中和佳子	4. 巻 68
2. 論文標題 音楽表現の質の深まりを目指した小学校音楽科の器楽学習	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要.第六分冊, 教育実践研究編	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小川 容子, 早川 倫子, 村上 康子, 山中 和佳子, 川田 弘人
2. 発表標題 音色と向き合い, 音色と関わる器楽活動の探求: 3つの小学校の授業実践を俎上にあげる
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 瀧川淳編著, 山中和佳子ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 136
3. 書名 1人1台端末でみんなつながる! 音楽授業のICT活用ハンドブック	

1. 著者名 津田正之・酒井美恵子編著, 山中和佳子ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書出版株式会社	5. 総ページ数 103
3. 書名 学びがグーンと充実する! 小学校音楽 授業プラン&ワークシート 中学年	

1. 著者名 初等科音楽教育研究会編，山中和佳子ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 初等科音楽教育研究会	5. 総ページ数 256
3. 書名 改訂版 最新 初等科音楽教育法 2017年告示「小学校学習指導要領」準拠 小学校教員養成課程用	

1. 著者名 齊藤忠彦・菅裕編著，山中和佳子ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 256
3. 書名 新版 中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法	

1. 著者名 日本音楽教育学会編，山中和佳子ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 248
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------